

指導資料

図画工作科・美術科 第47号

鹿児島県総合教育センター
令和2年4月発行

対象
校種

幼稚園 小学校 中学校
義務教育学校 特別支援学校

「テーマは自由です。」からの脱却 — 思いをもつ場面 — 絵に表す活動の指導②

シリーズ第2弾は「思いをもつ場面」。絵に表す活動に限らず図画工作科全般において、「思いをもつ場面」、つまり「導入」は、題材との出会いの場であり、要になります。本号では、思いをもつ場面の指導内容、そして各学年の導入について例を挙げて説明します。

1 「思いをもつ場面」に必要な指導内容

全ては、導入次第ですよ。



表現活動においては、子供たちが、自分の思いを自由に表現できることが保障されていなければなりません。しかし、「自由にかいていいですよ。」という導入は、一見、子供たちの発想や自主性を大切にしているように見えて、指導を放棄していることに他ならないのです。新たな目的やゴール、そこに至る技術、思考の方法などを示さなければ、子供たちはそれまでの資質・能力を発揮して終わってしまい、成長が望めません。

題材と出合う「思いをもつ場面」における、基本的に必要な指導内容として次の3点が挙げられます。

(1) 題材のねらいに気付かせる

まずは、子供たちの実態を基に、資質・能力を高めることができる題材を設定(発達の段階に応じて高めたい資質・能力については、学習指導要領解説の該当学年を参照)することが重要です。そして導入において参考作品の鑑賞や新しい材料、技法などとの出会いを通して、本題材で、何を意識するのか、どんな考え方を大切にするのか、何を工夫するのか、どんな資質・能力を伸ばしていくのかに気付かせるようにします。

終末に子供たちが題材を振り返ったとき、「こんな作品ができた。」だけではなく、「こんな力が付いた。」と、自分の学びや成長を実感できるように、導入から意識させることも大切です。ただし、発達の段階によって、どのように気付かせるのか、提示するのか等の取扱いについては異なるので、目の前の子供たちの実態に合った工夫が必要です。

(2) [共通事項]に気付かせる



そう、〔共通事項〕が重要なんですよ。



形、色、材質、光といった造形の要素については、全ての題材において普遍的に扱う〔共通事項〕となります。さらに、題材の中で特に大切にしたい題材特有の〔共通事項〕(例えば、小学校中学年での「重なりによる奥行き表現」等)を設定する必要があります(詳しくは指導資料「図画工作科・美術科第45号」を参照)。この〔共通事項〕は、語句として題材の冒頭で覚えさせるのではなく、**子供たちに実感させながら気付かせる**ようにします。例えば、子供たちは参考作品を鑑賞することを通して、「色や形を工夫することで、かいた人の思いが伝わるんだ。」「こんな視点で考えると工夫できるんだ。」と、〔共通事項〕について発見することができ、ここで発見した〔共通事項〕を「造形的な視点」として、表現や鑑賞の活動の中で生かしていくことになります。

教師としては、子供たちが参考作品に影響を受け、似たような作品になってしまう点が心配なところですが、鑑賞の中で子供たちが行うのは、作者が思いを実現するのにどのような工夫をしたのかを〔共通事項〕を視点として見つけることです。目的をもって見せることで、心配は杞憂となります。

(3) 思い(主題)をもたせ、発想・構想を広げる

題材を通して確実に資質・能力を高めるためには、子供たちが主体的に題材に取り組むことが大切です。かきたい気持ちや対象にかける思いを高め、こだわりを強め、主題をもち、

発想を広げることができるような出会いが必要です。そのために**教師は、子供たちの実態に合う「題材にまつわる物語(必然性)」を設定することが大切であり、題材との出会いを演出する必要があります。**子供たちが興味をもち、発想が広がるような**題材名を工夫することも大切**です。見たことや風景に自分の思いを託して表現する場合は、「その場所を選んだ理由」や「その風景から伝えたいこと」といった主題を明確にし、その風景をどのように表現するのかについて発想や構想させる必要があります。また、**想像したものを表現する場合や機能的な表現をする場合**には、「どんなもの・ことを画面に表すと思いが伝わるのか。」「どんな場面設定をするのか。」といったアイデアを広げる活動が必要になります。テーマを基にしたイメージマップ等の思考ツールを活用しながら拡散的思考と収束的思考を発揮させ、表現するものを定めていくことが大切です。

<コラム> 「質は量の中にある」～イメージマップ～

創造的思考の先駆者であるA・オズボーンは、「質は量の中にある」とし、よい発想のためには発想の量が大切であることを述べています。「量を増やす」、つまり思考を広く「拡散させる」ためには、広げるための「視点」が必要であり、「色」、「形」といった「造形的な視点」の生かしどころです。生まれた数々の発想について考え、判断し選択して「収束させる」試行錯誤を経て、アイデアが固まっていくことになります。イメージマップは、拡散的思考を「見える化」することができ、同一の図の上で収束的思考も行える点で極めて優れている思考ツールです。

2 各学年における指導のポイント

役者になりましょう。



(1) 低学年～再現する～

低学年の子供たちの絵は、再現の絵です。子供たちの嬉しかった思い出や、体験して感じたこと、関心のあることから想像したことなどを再現する中で生まれてきます。例えば、子供たちにとって楽しい活動・強く印象に残る活動の直後に絵に表す活動を設定すると、直前の活動の思いが反映した絵が生まれるように、子供たちが「どうしてもかきたい」と思える題材を設定することが大切になります。

子供たちの思いを膨らませるためには、体験したときの「楽しかった、うれしかったことをかきたい。」といった強い思いを会話で引き出すことが必要です。教師や友達と交わした言葉を基に、子供たちは実感を伴って振り返ることを通して、発想を広げることができます。いかに楽しくイメージを膨らませるか、夢の世界へ引き込むかといった点にポイントを置き、教師自身が楽しく演じることが大切です。教師は、特に図画工作科の時間は、「役者」でなければならないのです。

<低学年の題材例>

- 楽しく遊具を使って遊んだこと
- 生活科・体育科での体験を通じた感動・発見・驚き
 - ・ 動物との触れ合い、町探検での気付き、栽培活動での発見、飼育中の観察、運動ができた喜び など
- 家族との楽しい思い出
- 不思議な卵（箱）から何が出てくるかな
- このお話の続きはどうなるかな

(2) 中学年～こだわる～

中学年の子供たちは、低学年での「感じたことや想像したこと」に加えて、「見たこと」から着想を得て表したいことを見付け、表現できるようになります。「これがかっこいい。」「ここがきれいだ。」「これはすごい。」といった見た感動を基に、「これを表現したい。」という強い思い、つまり主題への「こだわり」をもつことができ、子供たちの主体的な対象の観察や表現の工夫を引き出す原動力となります。そのため、「何を一番かきたいのかな。」「どんな感じにしたいのかな。」といった主題を明確にする問いかけが重要です。

また、中学年は、低学年のように自由闊達に表現する子供から、高学年や中学生のように精細な表現を好む子供まで、個人差が大きく現れる学年です。そのため、**子供たちの実態を把握し、興味や関心を引きつけ、多様な表現が可能になる「幅のある題材設定」が必要**になります。さらに、この時期の子供たちは、友達との関わりにまで視野が広がり、自他の作品を比べ、「上手であるか」が気になりがちです。特に見たことから主題を定めて表現する題材を設定した場合には、教師が、子供たちの思いが表された多様な表現を、それぞれの表現の価値を明らかにしながら賞賛することが大切です。また、互いの作品を鑑賞する際に、それぞれの作品の表現が、主題とどのように関連しているのかを見付けたり、自分が感じるよさを伝え合ったりする活動を通して、互いの表現を大切なものとして認め合うことが重要になります。

(3) 高学年・中学生以降～思いを伝える～

必然性を大切に
した題材づくりをしま
しょう。



高学年から中学生になると、事物や事象について深く考えることができるようになり、自己を深く見つめた主題を設定できるようになります。また、意識や活動範囲は社会的に広がっていくので、他者へ伝えたいことや社会に訴えたいことから主題を生み出すことができるようになります。

ここで大切なのは、題材の設定を通じて、**自分が表現しなければならない必然性を感じる**ことができるということです。例えば、「感動、人の営みのよさやその人の思い、社会の課題などを、見る人へ伝えたい。画面に表したい。」といったメッセージ性のある主題をもてる題材を提示することも有効です。そのような題材を設定することができれば、試行錯誤する中で、自分の思いだけではなく、多様な視点から自己の表現を見つめることが必要になり、広く、深い思考が求められていきます。また、それに伴い、教師の言葉掛けも、「どんなことを見る人に伝えようとしているのか。」「どんな作品にしたいのか。」「主題に迫ることができる内容になっているか。」「といった子供たちの主題を明確にしていく工夫が必要です。また、「なぜその場面なのか。」「見る側は、どのように受け取るだろうか。」「といった主題と表現と見る側をつなげて考えさせる言葉など、子供たちが自分の考えや表現を、問い続けていけるような言葉掛けに変化させていきます。

つまり、高学年以降の題材の成否を決めるのは、教師が常日頃から題材設定へ向けて、子供たちの興味・関心や課題意識、地域での実体験、地域社会の状況、世間一般の話題、教育活動を受け入れてくれる地域人材、商店街や商工会議所といった学校との連携が期待できる諸団体などの、**子供たちを取り囲む状況について情報を収集し、教材化へ向けてのアンテナを高くしておくことが極めて重要になるのです。**

<コラム> 図画工作・美術科は導入次第です

美術教育を語る場では、「図画工作・美術科は、導入次第。」と以前から言われてきました。これは今日でも変わりません。子供たちが活動の楽しさに気付いたり、目的を明確にもてたりすると、主体的に活動に取り組みます。ですから、「こんなことを表したい。」「この感動を伝えたい。」といった思い(主題)をもつ瞬間、つまり、導入の「思いをもつ場面」が極めて重要になるのです。そのため、子供たちが全力で取り組みたくなるような、子供たちの実態に合った導入の工夫が、教師の腕の見せ所であり、授業者自身が題材を設定する理由でもあるのです。

次号は「線描する場面」

－引用・参考文献－

- 文部科学省『小学校学習指導要領解説図画工作編』平成29年
- 文部科学省『中学校学習指導要領解説美術編』平成29年
- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説芸術編』平成30年 (教職研修課 福森 真一)